

山姥乃穴

特 259

652



始



特259
65Z



麻^ま素^す
寐^み乃^の
夢^む素^す
寐^び



神通遊戯	去來隨緣	藏微月下	行落花前
------	------	------	------

山姥乃穴

無方齋老人

石城山道場の悪友に擲掄せられて圖に乗り、胡亂に妄語して此の小冊子を成す。たゞ憶ふに我が古神道の體裁まさ
 に此土を拂て滅絶せむとするもの一千五百歳。ひとり龍翁
 の古傳在する在る有りて群妖悲み走り閑鬼驚き潜むも、尙
 ほ時の人錯^{アヤマツ}て看過するもの多し。吾輩老來厚面皮、醜態に慣
 れて醜を忘れ落草の舊話を打して二三子の鼻頭に拈出す。

ひとへに石城山道場孤危の風標を護るに資せむと欲するのみ。

石城山は神籠石を以て巻かれ、東西南北の四窟あり。俚人俗稱して山姥乃穴といふ。是れ萬古難透の關なり。且らく借りて此の小冊子に題す。山姥乃穴何の消息かある。試みに擧す。看よ。

○第一則

天孫瓊々杵尊は高天原大神界の主神にあらせ給ふ天照大御神と天地生成根本靈徳の大神たる高皇產靈神の御命により、天の磐座を離れ給ひ、天の八重雲を排分けて稜威の道別に道別きて日本國土に降臨し給へり。是れ人間世界神

律の根本たり。

○第二則

その「時」を知ること神道なり。世界の有機、日本の有機を知り。斯かる場合に踊る左右表裏からの反統制的作戦を撃破し、日本帝國天定の遠猷大略實行の爲め滅私奉公、其の立場々々に忠實なること、神道の肝要たり。

○第三則

我が神の道に於ては本齋かれこれ教理といふやうのもの無し。神典古傳にも説教じみたるもの無きのみならず俗情を以てみれば倫理上如何やと思はるゝ節さへあり。是れ大いに仔細あることなり。只だ夫れ誠なり。天地に澄みわた

りて清々しき大道なり。何の言ひごとも無し。神通無方なり。

○第四則

古道は彼れ此れの理窟も無く只だ誠なり。誠なるが故に天子様に對し奉りては當然忠となり、神祇に對し奉りては當然敬となり、孝友和信愛となり、一旦緩急あれば義勇奉公となるなり、山は高く水は長し、朝起きれば顔を洗ふなり。是れ神ながらの道なり。

○第五則

幽顯出入は只だ神變のみにして不出不入と同様なれば問題にあらず。たゞ皇基恢弘、國威宣揚のみを念とすべし。神の道は「むすび」の道なり。幽顯不二、只だ這の信念光明萬古の

道なり。

○第六則

我が神ながらの古道に名無し。中古以來名づけて神道といふ。神道は産靈ムスビの道なり。産靈の神徳の造化發展の道なり。我が神典これを明傳し、我等眼前に觀るところの山河草木森羅萬象これが證明たり。

○第七則

古事記卷頭に云、天地初發之時アラタマヒと。その時より更らに十九年以前の自己の面目を忘失する莫かれ。石城雨濛々。磐門雲漠々。

○第八則

我が神典アケキココロ「清明心」を修養の目標とせり。應神記に「丹心」キヨキココロとあるも同じ。丹心キヨキココロの巾と長さとを先づ知るべし。

○第九則

天之御中主神のヌシはノウシの約なること古人も説けるが、ウシはウチの轉音なり。ウチとは大靈ウチなり。氏の語もこれに出づ。

○第十則

神と成るは未だ難からず。人と成るは最も難し。

○第十一則

ミチ(道)の古義。ミはマに通ずる接頭語にしてチなり。チの古義は靈なり。靈とは至大無外至小無内にして無始無終神

用不可思議のものなり。道を知るなど容易に云へるものにあらず。

○第十二則

老子首章。玄之又玄。衆妙之門。古來諸家の註、どうも點頭し難し。Old(明治三十七年) Giles(同三十八年)等西人の註も不感性の婦人の人生觀に類す。よく此の首章の義に透徹し來らば、ますますみのむすびを觀るに些子相應の分あるべし。

○第十三則

雪は雪雨は雨なり神は神人は人なり水は水なり。

○第十四則

多智多才にして彼れ此れ巧妙に思議する人は、ますますみの

むすびに合體し難し。只だ尅的簡當に直觀を要す。

○第十五則

「むすび」の道にまかせて思議を煩はさぬを神ながらの道といふ。幽顯去來も只だ幽顯去來のみ。

○第十六則

明日を期せず、今日只今、直ちに我れ本より神たりしことを確かに徹見して塚根する莫かれ。事に當り物に觸れて自在を得ざるは只だ場慣れざる爲めのみ。何の不足も無し。ドウスルコトモイラヌなり。

○第十七則

眞に道心を以てすることは何事も善となる。このこと今

人解し難し。道心とは彼れ此れの念無く只だ誠を以てすることなり。誠とも思はぬとき即ち誠なり。

○第十八則

「神たる我れ」を見究めて何物にも昧クラまざる心すなはち道心なり。正しき神法道術に遊ぶ心すなはち道心なり。萬物を憐み育つる心すなはち道心なり。

○第十九則

喜怒哀樂の起滅は只だ其の起滅にまかせて妙なり。それを氣に病むこそ愚かなれ。鈴屋の翁の歌にも「事しあればうれしかなし」と時々動く心ぞ人の眞心とある通りなり。喜怒哀樂は只だ一時の喜怒哀樂なり。

○第二十則

活動寫眞の映寫さるゝ場合たゞ一枚の畫面が種々に變化するも、實は數千尺のフィルム^{フィルム}の運動なるが如く「むすび」も亦た然り。「むすび」は相續すれども徹底「ますみのむすび」なり。産靈^{ムスビ}の神徳は刻々靈動して甲乙丙丁と移れども其の靈動の外に何等の實體無し。フィルムも無し。フィルム無き活動寫眞なり。

○第二十一則

「ますみのむすび」の當體に消え去て歡天喜地の日あるも、如何せん日々の生活に和し難しと苦慮する勿れ。それは只だ癖が残り居るだけなり。時々照顧すれば年月につれて癖

はうすらぐものなり。うすらがすともよし。

○第二十二則

我が喜怒哀樂も人の喜怒哀樂するも「ますみのむすび」と一應見破し居るつもりの人多し。更らにウンと徹底して其の知見を爆破し去るの勇無きか。行いては到る水窮まる處。坐しては看る雲起る時。

○第二十三則

天行居に格神講あり。既に二十星霜。格神とは神我れに格^{イダ}り我れ神に格^{イダ}るを云ふ。神と我と同か異か。同ならば神我れに格^{イダ}り我れ神に格^{イダ}るを要せず。異ならば水と油の如く格^{イダ}るも格^{イダ}り得ること無し。月は寒潭に落ち、烟は古渡に迷ふ。

○第二十四則

山上天啓に云「道を忘れて道をふめ」と。是れ何の道理ぞや。眞に能くこれを知るものは萬劫にも惡道に墮せず。知るものは知らず。知らざるものも知らず。如何か此の關を透過せむ。

○第二十五則

「神たる我れの眼を開けと云へば、忽ち「むすび」の神律を忘れ、神法道術を侮り、祭式を笑ひ、道德人倫の外に行かむとするものあり。道心無き世智辯聰の徒得々として心靈を虚談して萬斤の罪科を造作す。

○第二十六則

神武紀云、天關テンクワンを開きヒラ雲路ウンロを披ヒラくと。如何んか是れクワン關。

○第二十七則

萬有は「ますみのむすび」にして即ち「神變」の當體なり。ますみは「不動」なり。むすびは「動」なり。ますみのむすびなるが故に動にあらず。不動にあらず。神變にあらず。たゞ「ますみのむすび」なり。そこがどうも言ひにくし。故に假りに神變ともいふ。

○第二十八則

「ますみのむすび」の觀法は不斷に練りに練りて年月を積み始めて妙用あり。只だ一度や二度や五度や十度成る程と點頭しただけにては實地に何の力ともならず。必ず毎日五分間にても收目癡坐、ますみのむすびとは何の道理ぞと

観念すべし。

○第二十九則

多忙で観法など出来ぬといふ人は、何か不平不満のある時、氣の腐る時、腹の立つ時、心の暗くなる時だけにてもよし、奮發して「ますみのむすび」を觀じ來り觀じ去るべし。始めはうまく行かずとも、追々に必ず靈驗あり。少し味を覺えし上は、小成に安んぜず益々志氣を策勵して道力を長養すべし。

○第三十則

「ますみのむすび」が手に入つたぞと石城山頭に歡喜踊躍す、すでに早く蹉過し了れりなかく。

○第三十一則

物を物して物に物せられざるを神といふ。死んでから神になるといふが如き俗な考へは夢にも起す可らず。うまく物に物せらるゝを物に物せられずといふ。

○第三十二則

道心の無き人は如何とも手の下しやう無し、道心によらずして何物かを求め、何事かの功を樹てむとするものは深く省みて愧づべし。

○第三十三則

口をそゞぎ手を洗ひ靜かに神社なり神殿なりの大前に立つ時、是れ直ちに何ぞや。拍手の音は虚空を打ち割る。虚空割れて消え去り身をおく處ありや。おくべき身ありや。

○第三十四則

「むすび」のまゝに成り切りたるどころ直ちに是れ「ますみ」のむすびなり。これ神ながらの道なり。

○第三十五則

「ますみのむすび」とは「ますみ」にもあらず「むすび」にもあらず「むすび」が其のまゝ「ますみ」といふ理窟にもあらず只だ「ますみのむすび」なり。孫武美人を斬る。

○第三十六則

山は高きにあらざるも仙あれば名あり。水は深きにあらざるも龍あれば靈なり。人は智にあらざるも信あれば必ず達す。

○第三十七則

あめつちの神の心はみなひとつよき人になれよき人になれ。

よしあしもおもはずいつもまめやかにつくす人こそよき人ぞかし。

○第三十八則

和は神道なり。人と人と和するのみを云はず。牛に騎れば牛に和し、雨を聴けば雨に和し、順は順に和し、逆は逆に和し、街頭に行けば街頭に和す。まことの道なり。村有酒樓古都望
怡樂農なり。

○第三十九則

地理のわからぬ亂軍の支那戦線にて重傷を負ひて斃るる日本兵士。東方はごちらかど訊き、東方に向つて天皇陛下萬歳を唱へて絶息す。鬼神も氣を呑み聲を呑む。たゞ是れ日本精神。所謂宗教に關せず。

○第四十則

龍樹は隱形術を以て夜々多數の宮女を姦し、八宗の開祖となれり。彼れ今日何の處に在る。一點の水墨兩處に龍となる。

○第四十一則

きりすどや釋迦や孔子を地獄から救ひ出すこそ人の道なれ。

○第四十二則

我等人間は善惡吉凶の二路何れかに向ふのみ。其の二路の何れかに向ふ姿勢によつて大事決す。如何に失敗を重ねることも如何に俯甲斐なさを感ずることも如何に寸前尺退の模様ありとも、忠義正道に向ふ姿勢の人は早晚必ず達す。今生だけのことに非ず。むすびの神秘畏るべし。微々たる信念も萬劫につゞくものなり。我れ未到なるも先づ他を到らしめむとの道心こそ傳家の重寶なれ。

○第四十三則

神道の修行者にして本務本業を自ら輕んじ卑みて所謂修行に精進する輩は神道の賊なり。忠實に其日其時のつと

めに一心不亂なること即ち神道の修行なり。高等文官にて
も一兵士として出征すれば即ち一兵士として敢然全力を
全舉することは是れ神道なり。

○第四十四則

現人神アラヒトカミの臣子たる無上の光榮に恵まれながら、或ひは自
ら稱して我れは佛子なりと云ふ。即ち亡國印度王子の子な
りと云ふ。或ひは又た猶太の大工の子のおかげをたのみと
云ふ。

○第四十五則

古人云。神は道に勝たず、妖も亦た徳に勝たず。禍福未だ發
せざるは猶ほ化すべきなりと。こゝに云ふ神は或る程度の

鬼神の類を指す。極所を云へば神の外に道無く道の外に神
無し。猶ほ化すべきなりといふは不善を止めて善を行ひ以
て氣線を化作するをいふ。

○第四十六則

本來東西無し、何の處にか南北あらむ、吉凶禍福たゞ一心
に在りこの妄想を双肩に擔ひ、日々東方より日の上ること
さへ知らず。明治大逆事件に三人の僧侶ありたる如き自然
の數なり。神道は「むすび」の道なり。皇典にもトは神事の宗源
と明記し、近世大嘗會にも悠記主基のト定あり。みだりに古
傳古俗を紊らんとするを眞の危険思想といふ。

○第四十七則

延喜元年元旦日蝕。時平讒を講じて菅公を罪し得たり。大地黒漫々。

○第四十八則

日蝕月蝕の爲めには古來世界中の人間みな馬鹿をみたり。將來神界實相明瞭となるの日。古來宗教の爲めに馬鹿をみたることを全人類點頭すべし。

○第四十九則

道場の大家みな言ふ。ますみのむすびドウスルコトモイラヌと。斯く思ひ居る間は其のドウスルコトモイラヌといふものに縛られて自由の利かぬものなり。思ひ切つてとんと其れも手放すべし。ドウスルコトモイラヌなり。山姥乃穴

も自動車にて通れるなり。

○第五十則

古人云。禮は玉帛に非ざれば顯はれずと。真情内にあれば必ず形となりて外に顯はるべきが天之道なり。虚禮を排するは可。實意のこもるものは手拭一本と雖も光明遍照なり。神道祭式もそれなり。

○第五十一則

千年ふる茄子のへたこそ尊とけれ近江の國のしづが伏屋の。

○第五十二則

人々みな其の體内に天地八百萬神鎮坐あらせらる。如何

なる祭式を以て何の日に奉祀禮拜しつゝありや。試みに道へ看ん。

○第五十三則

王母七枚の神桃を送り來るを夢む。三枚は苦く。四枚は甘し。

○第五十四則

水位先生或日同時に東西を過ぐ。東地に於て知人と談笑し。西地に於て友人と交渉す。何れの身を以て眞とするや。速かに道へ。

○第五十五則

男は何故に子を産む夢をみざるや。

○第五十六則

后翠の女房の嫦娥は亭主が西王母より貰ひし仙薬を盗み服して亭主を置きざりにして登仙せりと傳ふ。此の不貞腐れ何としてか其の神通を得たる。一九と二九と相逢て手を出さず。

○第五十七則

先哲云「正成一兵衛尉を以て居然として天下の重きを以て自ら任ず」と。我天行居同志は各自此の意氣無かる可らず。

○第五十八則

糞をきたながる犬は上等の犬なりや。

○第五十九則

龍となつて天を飛ぶは易く。蛇となつて叢に入るは難し。好箇道場の諸君子。日々石城山に上り、日々石城山を下る。

○第六十則

新婚生活者が電信工夫を墜落せしめたりとの話あり。過、何の處にある。笑を解する者は多く、哂を解する者は少し。

○第六十一則

あばらやなれども平治が住家。煮豆に煎茶もあれば春もよし。秋もよし。神仙も亦た此の風流を羨みて竹垣より覗く。

○第六十二則

道場の諸君子まさに謂^{オモ}へり。天行居は十年前に於て山の芋時代を過ぎて鰻となれりと。未だ識らず今日尙ほ山の芋

時代に在ることを。

○第六十三則

昭和五年秋。余ひとり石城山參籠。或夜若宮社に近き路傍にて約二百歳を経たる老狐。平身低頭して云ふ。我れ悪を作さず。此山に住することを許せと。余云。汝が布衫を我に還し來れ。老狐擬議。余即ち老狐を踢倒す。老狐禮拜して跳一跳し去る。

○第六十四則

一少女あり。來つて無方齋^{ヨキ}を過^{ツイ}る次で即ち問ふ。石城山道場に於ては徒らに籠頭角駄を重架するの感ありて益々日常を束縛せらるゝに似たり。如何。余云。縛脱ともにますみの

むすびなり。爾が不自在といふも爾が自在なり。少女一揖して去る。

○第六十五則

問云。如何なるか。是れ日本精神。答云。朝日に匂ふ山櫻花。うしろに松の大枝あり。あたま御用心。

○第六十六則

國際法は國際取引前例集のみ。能く此の邊に參得するものは日常人間葛藤に於ても多少の奇特あらむ。

○第六十七則

近村に一婆子あり。徳川時代のものらしきマリアの像を子安觀音の像と教へられて買取り、多年熱心に禮拜して觀

音陀羅尼を唱へ、一種の靈感を得たり。是れマリアと爲さむ乎。觀音と爲さむ乎。速かに道へ。

○第六十八則

石城山から富士山までの距離、實に一萬六千里。石城山から山東省泰山までの距離、實に二寸三分。

○第六十九則

深草の少將の如く九十九夜にて挫折しては惜しきことなり。

○第七十則

紀文大盡は千兩箱を積み上げ、吉原大木戸を締めさせて駄々羅遊びをやらかし、金盡くれば兩國橋に乞食して淡々

たる閑活計を樂みたりと傳ふ。従前好箇の神道人、或ひは之れを是とし、或ひは之れを非とす。

○第七十一則

思て通へば五キロが二キロ、逢はで歸れば又た五キロ。此の神通仔細に究明し去らば忽ちバケツは天空に立ちて踊り、雨傘は井底に在て苦笑せむ。

○第七十二則

紫式部歌。月影のうつらぬ水はなかりけり澄むも濁るも照るにまかせて。油斷のならぬ女性なり。

○第七十三則

孟子云。萬物我れに備はると。是れ何の閑妄想ぞや。斬て三

段と爲す時如何。

○第七十四則

耶蘇、犬の小便かゝりたる路傍一莖の草花を拈起して云く。日産コンツェルンの榮華も遂に此の花に及ばずと。此の一句、二千年の滯貨。今に至るも買ひて無し。

○第七十五則

天行居術語「産靈紋理」の一句子。恰かも八幡製鐵所の大鎔鑪の如く、百難萬艱を即坐に消融し、凡人達人同時に五眼を開く。何によつて此の靈驗ありや。釋迦孔子等一隊となりて怖走失糞す。

○第七十六則

みだりに復古を云ふ莫かれ。言語にもせよ、風俗にもせよ、廢るべくして廢れ、遷るべくして遷りたるなり。春夏秋冬。

○第七十七則

陸奥宗光は仙臺の獄中に於て理學正宗を書き、出獄しては外相となりたり。橋を過ぎて村酒あり、岸を隔てて野花香ばし。

○第七十八則

「それほど心残りなら、泣かしやんせく、その涙がしじみ川へ流れたら、小春が汲んで飲みやろうぞ」哀々切々満天滿地の大愚癡、直ちに是れ驀然として道心の發動なり。疑ふ勿れ。此の場面をみて泣かざるものはタトヒ聖賢の類ひと雖

も畜生妖怪の種族なり。

○第七十九則

清潔は神道の大本なれど、時と場合により神用自在を要す。いかなる場合にも「清潔」に取り憑かれて自ら悶えるは卻て是れ一種の汚れなり。如何なる美人にても腹の中には多少とも糞小便の溜り居るものなり。

○第八十則

反撥力を強大の上にも強大にせむが爲め、引きしめた上にも引きしむるにより、ボクリと折れることあり。

○第八十一則

神示云。苦流時幾和氣乎秘妬爾指羅須那甲美巴微且烏留

と。このこと刻意徹惘參究體得を要す。我が古道修行の神髓
たゞ此處に在り。

○第八十二則

松陰云。死地に入らざれば良士と成る能はずと。草を刈る
にも算盤を弾くにも水を汲むにも人を説くにも命がけに
て真劍なるべし。人間老い易し。

○第八十三則

物事は何でも一應は裏返して考へてみよ。その場合自己
といふものを全く離れて七尺ほど上から他人の眼を以て
看よ。

○第八十四則

端的に何の不平不満ありやと問詰すれば、驚きて自ら心
力を絞り八方苦慮して其の不平不満といふものを論理的
に編成する爲め萬人皆な天才的伎倆あり。

○第八十五則

そしられて腹立ち、ほめられて嬉しがる間は獨立心無き
證據と知れ。道路千里に鈴哘す。

○第八十六則

慧敏辯功、二百問に二千答し得るも、日常時間の約束さへ
實行出來ず消すべき電燈をつけっぱなし居るやうにては
何のことも無し。

○第八十七則

毎日風呂に入りたる時は、ノアの洪水と思ひ、浴室を出づれば誓つて新生活に入るべし。

○第八十八則

三重苦の聖女と稱せられるヘレンケラー女史。昨年我國より歸りて腸部に疾を發し、長らく病榻に苦惱す。愛の天使の如き此人、何によつて四重苦を得たる。和氣靄然。

○第八十九則

むかし道玄といへる者あり。學者にして豪富なりしが、全財産を水底に投下し、娘に箒を造らしめて活計せり。何ぞ細民救恤に用ひざると問へば、毒と知りつゝ人に與ふるに忍びざりきといふ。狂に似たりと雖も亦た現代人の眼睛を刺

破するに足らむ乎。

○第九十則

わづかな物を恵み憐む實行さへ出來ずして大言壯語し、光陰虚しく度る人あり。風流なことなり。

○第九十一則

十年前のこと。或る橋の下にて親乞食が子乞食を叱り居りたり。まだ寝て居るのかそれじやから貧乏するのぢや。阿呆め。

○第九十二則

米國人來らば珈琲を出し、英國人來らば紅茶を出す。神道とは只だ斯くの如きのみ。

○第九十三則

露國にては探偵政治二十年。今や對人信用といふもの全滅し、一にも文書、二にも文書、その煩雜さには露國政府も困惑し居れり。

○第九十四則

市俄古郊外の飼畜場。敷地五十八萬坪。五十萬頭の牛豚を飼育し得られ、一年間の受入高二千萬頭。場内屠場五十。理想的施設といふものにより、見る／＼うちに牛羊豚の大群は東門より入り一時間後立派な製品となりて西門より市場に出づ。アーメン。

○第九十五則

牛乳にて造りたるキモノを着、馬糞より製したる或る罐詰を食し、外國婦人の古靴下を以て再製したる半襟を頭に飾りて神前に額づく世となれり。

○第九十六則

人前にて接吻するを恥とも思はず禮儀と心得居るは西人なり。我國にても近年其の真似をして得々たる種族ありと云ふ。犬は人前にても交尾するものなり。

○第九十七則

乃木大將は渡歐の際、只の一度もジャバンと語らず、徹頭徹尾ニッポンにて萬事を辨じ去りたり。脚跟峭措。眼腦玲瓏。

○第九十八則

古人云。朝に道を聞て夕に死すとも可なりと。此語極めて
入手し難し。猛省せよ。

○第九十九則

石城山道場より山に登る。林畝の間一株の櫻花あり。昨日
は風無きに散り。今日は風あるも散らず。

○第百則

寄生木ヤドリギの多きは石城山七怪の一なり。全山の寄生木を伐
り盡せば卻て也た生ずるや否や。

○第百一則

天之珍女命。お臍を出して踊り給ひ群神笑ひごよめき天
開開く。人間千萬關。これを開くに道あり。

○第百二則

川柳子。辯天を六福神が狙つて居。和して同せず。何の畏怖
も不安も無く微笑を以て琵琶を彈ず。したたかものなり。

○第百三則

七福神の一に祭り込まれたる布袋和尚は支那浙江省の
乞食坊主なり。寢臥處に隨ひ言語恒無く、一杖を以て布囊を
負ひ市に出でて物を乞ふ。豚肉魚肉何でも可なり。囊中には
食ひ残りの物や古草履雜物等を貯ふ。人の爲めに吉凶を卜
して誤らず。偈あり。一鉢千家の飯。孤身萬里に遊ぶ。青目人を
観ると少し。道を問ふ白雲の頭。梁の貞明二年三月三日。嶽林
寺苑内の磐石に坐し。放屁三發を以て脱去す。身に光明あり。

○第四百四則

あまり嫁選びすると嫁は無きものなり。何事も此の神祕あり。苦なるかな。苦なるかな。

○第四百五則

笑て毒を仰ぐソクラテス。泣て馬謖を斬る孔明。野檉兩三箇。

○第四百六則

米もあり炭もありけり我が庵は雪のふる日も雨を聴く夜も。

○第四百七則

善を行ひて人の知らざるを不満に思ふ。自費で骨を折り

たることを何彼の機會に先方へ知らせたしと考へる人。みな善人なり。

○第四百八則

真心よりするに非ずして徳行の真似するは詐欺なり。その徳行を大にすればするほど詐欺も益々大なり。無心よりせる徳行は一些事と雖も光り輝きて天上に満つ。

○第四百九則

人よりも少し多く勉強し、人よりも少し多く忍耐する人を人並みの人といふ。

○第五百十則

算盤を弾くにも飯を炊くにも、何を爲すにも、如何なる些

事も「これが最後の仕事」と心得れば身を入れて仕事が出来生命のある一時が得られるものなり。

○第百十一則

木戸孝允青年時代、桂小五郎修學餘暇音曲を稽古して伎倆拔群。其の師匠より今一步にて本職になれると云はれ、斷然中止す。

○第百十二則

佐藤一齋ほどの老大家幾百回となく講義せしものを更らに少年の爲めに講ずるにも必ず其の前夜綿密に講義の準備工夫を怠らざりき。

○第百十三則

言靈の幸はふ國ながら、言葉は自在ならず。俺が悪かつたとはなか／＼云へぬものなり。

○第百十四則

外見孝行に見えて、實は親も子も眞に打ち解け居らざるものあり。外見孝行とも見えざれど親も子も相應にそぐひよき状態にあるもあり。家の都合、人の氣質、種々の事情により、なか／＼外觀にてはわからぬものなり。政治界や事業界の名士の中にて孝行を看板にする人もあれどそれもよろし。百年不孝に見えて千萬年孝行なるもあらむ。

○第百十五則

名利の念濃きやに見えて實は淡きあり。淡きやに見えて

濃きあり。見がたきものなり。名利の念深ければ道心浅く、道心盛んなれば名利の念うすらぐものなり。同じことを爲しても其の人にあり。其人の心にあり。

○第一百十六則

上杉鷹山公。藩祖の命日に蜆を買へる家臣の妻あるを高臺より望み見て心中に疾む。此の婦人は其れを買ひて河に流し、ひそかに藩祖の冥福を祈れるなりき。世間これに類すること少からず。

○第一百十七則

世の中にも世の外にも無償なるものあること無し。東坡の謂はゆる山閉の明月も江上の清風も人々の修養の高下

道力の深淺により感興一齊ならず。況んや他の事物に於て然らざらむや。如何なるものも今生または先世より自ら工作し來らざる無し。而かも只だ一物ありて工作に關せず。祕藏して山姥の窟中に在り。

○第一百十八則

わけもなくすむべきことをむつかしくするがこのよの智慧にぞありける。

○第一百十九則

釋迦ほどの作家も、或る娘さんの一鉢の供養を受け、その中の茸に中毒して往生の素懷を遂げたり。鬼者外。福者内。

○第一百二十則

濃きあり。見がたきものなり。名利の念深ければ道心浅く、道心盛んなれば名利の念うすらぐものなり。同じことを爲しても其の人にあり。其人の心にあり。

○第一百十六則

上杉鷹山公。藩祖の命日に蜆を買へる家臣の妻あるを高臺より望み見て。心中に疾む。此の婦人は其れを買ひて河に流し、ひそかに藩祖の冥福を祈れるなりき。世間これに類すること少からず。

○第一百十七則

世の中にも世の外にも無償なるものあること無し。東坡の謂はゆる山間の明月も江上の清風も人々の修養の高下

道力の深淺により感興一齊ならず。況んや他の事物に於て然らざらむや。如何なるものも今生または先世より自ら工作し來らざる無し。而かも只だ一物ありて工作に關せず。祕藏して山姥の窟中に在り。

○第一百十八則

わけもなくすむべきことをむつかしくするがこのよの智慧にぞありける。

○第一百十九則

釋迦ほどの作家も、或る娘さんの一鉢の供養を受け、その中の茸に中毒して往生の素懷を遂げたり。鬼者外。福者内。

○第一百二十則

古來聖賢英雄豪傑美人に屬するもの、大概のべつに失敗を重ね居れり。孔子の如きは又た格別にて生涯の歴史は全く失敗の歴史なり。面白し。仲間は多し。

○第二百一十一則

潮沫シホウの凝れる海外ワヨトの國ながら金銀石油科學古文化。

○第二百一十二則

キリストに限らず誰も彼も皆な處女受胎により此世に行脚し來れり。疑ふ勿れ。

○第二百一十三則

神典によれば、久延毘古は人に賤しめられ、身動きもならぬ不自由境界に在りて神通自在。天下のこと知らざる無し

と云ふ。

○第二百一十四則

古傳タニグク。蟾蜍として説けるはヒガコトなり。彼れは飛行自在の神通を得たる谷神なり。道場の諸君は山姥乃穴より谷神を引きすり出して相見すべし。

○第二百一十五則

物を苦にする人、苦にせぬ人。同じく困難なる事件に逢著したるとき。どちらもどうにか濟んで行くものなり。預じめ搔いて痒を待つ。

○第二百一十六則

三つや四つのをさな兒より悪口を言はれて腹を立てる

人無し。をさな兒は笑つても怒つても泣いても面白きものなり。そこを一つ工夫すること神道の肝要なり。

○第二百二十七則

人の言うたことを聴き、人の書きたるものを見て、キザに感じたり癢に障つたりするは、すでに他の爲めに奴となれる證據。博學高識を以て任すといふとも偷心の走狗のみ。

○第二百二十八則

いつにても機會ありと思ふものは、遂に機會を得難し。思ひ切つて爲し得る時に爲しおくべし。藏書家讀書せず、金持金を使はざるのみを笑へぬなり。

○第二百二十九則

釋明せず默殺するは大人の風ありて奥床しく一徳なれども、釋明して他の爲めになり公の爲めになり世の爲めになる場合は斷然釋明すべし。卻て自己の徳を傷くるとも亦た可。

○第三百十則

古人云。不義にして富み且つ尊きは我に於て浮雲の如し。神道人は這の意氣無かる可らず。不義とは必ずしも盜賊に類するをのみ云はず。總べての不正當をいふ。

○第三百十一則

古人云。下士は勢ひに就き、中士は徳に就き、上士は怨みに就くと。道心ある者は善を行ひて禍に逢ふ如きことありと

も踏まれても蹴られても信すべきを信じて信すべき處を去らざるなり。

○第三百三十二則

夜光の明珠を獲て悦び祕藏するは一時の悦びのみ。何の効驗も無し。夜々照らし用ひて年月を経て漸くにして効驗をみる。

○第三百三十三則

いつたい良心といふもの君の敵か味方か。なに別に良心といふもの無く君が即ち良心か。茲に至つて釋迦耶蘇の徒も皆な頭を掉り尾を搖かして憐れみを乞ふ。

○第三百三十四則

月末になる毎に細君の人相が物凄くなり、火の車を運轉する生活も一種の風流なり。馬鹿云へ風流どころかどむつとするも風流なり。そんな氣樂な觀念は實地の場合出來ぬことなりと心を暗くするも亦た風流。

○第三百三十五則

喜怒哀樂は只だ喜怒哀樂のみ。春夏秋冬は只だ春夏秋冬のみ。春來れば冬は嫌はずとも去る。神様の店は正札にて一文も負からず。怒るときは怒りてよし。哀しむときは哀しみてよし。値切る莫かれ。

○第三百三十六則

石城山に西東北南の四窟あり。俗稱山姥乃穴と號す。第一

窟は神物祕書を藏し。第二窟は暗黒摸搦不著。第三窟は衆妙之門。第四窟は石臼の臍に以て相似たり。

○第三百三十七則

石城山に四窟無く。天行居に理窟無し。但だ偏屈の類ありて、みづから生涯を窮窟にするあり。

○第三百三十八則

石城山道場附近。林下湖邊。三々五々頭を聚め、兩々眉を結んで、此の「山姥乃穴」を商量するものあらむも、恐らくは徒らに精根を勞せむのみ。何が故ぞ。城南の村娃牛を叱して行く。

○第三百三十九則

神道を奉行する人は弱點の無き人となること勿れ。スキ

の無き人となること勿れ。他より打ち込まるゝスキの無きやうな人は、到底真心を以て人と交ること能はず。米内海相の如き八方破れのスキだらけの人も亦面白し。珍重。

○第四百四十則

桂區頭公。百難千非を受けて現世を去りたれど、兎も角人物なり。たゞ「忍」の一字を守り得て然りき。お鯉氏の知るところに非ず。

○第四百四十一則

龍の半盞の水を得て、忽ち雲を興し霧を吐き百里に雨らすものは未だ奇ならず。只だ君が今日此の小冊子を瞪視し得るを奇とす。

○第四百十二則

子供の喧嘩。大概の場合その是非を問はず親は直ちに兩箇を一喝し去る。一喝の用をなせりとする乎。一喝の用をなさずとする乎。

○第四百十三則

貴重なる人生の大半を面壁冷坐し、多少の奇特あるに似たるものあり。俯瞰して其の伎倆を檢點しみるに恰かも蝦蟆の如く、跳り得て一跳するのみ。

○第四百十四則

陰徳陽報。至徳無報。無報とは功德の盡くるとき無きを云ふ。報を思ふの念微塵も無くして徳を行ふを至徳といふ。

○第四百十五則

人間の福は千年以來の決算書なり。必ずしも今生の識見努力徳行と應ずるものに非ず。福鮮きものは宜しく自ら養ふべし。福とは名位壽富のみに限らず。

○第四百十六則

我れ昭和六年春四月十六日。浩歌して石城山を下り、歸り來て簸箕の譏を甘飲して今日に及ぶ。夜々奄然として化し去るが如く、日々胡亂に許多の閑事を管し得たり。千醜百拙。

○第四百十七則

新婚生活把住放行七婢八跳するも、老來皓髮たゞ茗を煮て相語るも、同じく只だ一場神變の當體にして彼と此と兩

般無し。咩々。

○第四百四十八則

耶蘇は十字架上に忍痛の悲鳴をつゞけて遂に絶息し、やがて玄胎を以て颯爽として弟子達の前に現はる。何の奇も無し。萬人みな彼れと同じく去來。一人の例外無し。萬福々々。

○第四百四十九則

長生きしたいと願ひながら老人になつたのを残念に思ふ。無理といふもの。

○第四百五十則

家族近親に病氣とか何とか不吉のこと起るとき。ともすれば神祇の守護を疑ふものあり。その不吉の時期が他の最

悪の時期より繰り替へられて比較的難儀苦痛の甚だしからずして済むことは知らざるなり。

○第四百五十一則

近松門左云。郭クワの世界にては誠から出た嘘もなく、嘘から出た誠もなく、縁のあるのが誠なり」と。鞍馬山で三度も齒の抜け代つた先生でも分疎不下ならむ。畢竟如何。

○第四百五十二則

何も彼も罪ほろぼしと心得るべし。何も彼も舊債整理と觀念すべし。整理を延期すれば利に利がつきて始末につかぬことになるべし。

○第四百五十三則

生死といふ名目ほど人間を誤らしめたるもの無し。毛蟲の蝶となる如く只だ神變にして生死にあらず。萬物生死あること無し。而かも毛蟲の蝶と化するは毛蟲の蝶と化するに非ざるなり。

○第百五十四則

四十前後までは誰しもさのみ感せざれど。相當の年配になれば光陰實に箭の如く一年は一月の如し。明日といはず決定し直ちに神變の一大事を始末し微塵の疑ひ無きを要せよ。

○第百五十五則

病苦死苦の深淺大小等は人の正邪善惡に因らず道力の

強弱高下に關せざるもの多し。市井無頼の破落戸の輩にても何等苦惱無く笑つて逝くものあり。神理の玄祕に屬す。故に必ず惑ふ莫かれ。タトヒ病苦死苦に七轉八倒なるも只是れ天候の或ひは雨或ひは風となるのみ。風雨一過。烟霞滿城の春。

○第百五十六則

何等これといふ善行功德も無くして時節到來し神變に直面するも憂ふる勿れ。只だ神種を以て神國に生れ、正神界機關の一端に結縁せる「むすび」を有難く思ふべし。斷じて惡道に墮せざるなり。疑ふ莫かれ。

○第百五十七則

只今不平不満あるもの神仙界に引越しても不平不満あり。満足し得る道力あるものは貧苦病苦社會苦家庭苦七難八苦の裏に在るも神仙界に在ると同様なり。このこと口頭に云ふも意味を得ず。方今直下、何の不满ありや。よくみれば不平不平は君が大嘘の皮ならずや。

○第百五十八則

人は皆無死無終の大仙身にして生死無く、生死といふは只だ竹の節の如き神變の符牒にて吾等毎日經驗する晝夜と同じものなれど、死すべき時に死するを死の成功と云ふ。軍人が戦死する場合の如きのみに限らず天之正命にて七轉八倒して病死するも死の成功なり。毎朝眼を醒ます成功

と同じ。

○第百五十九則

蜷川は篤信の佛法者なり。病臥中前庭に三尊の彌陀出現す。病苦を押しして身を起し弓を取て中央の大なる彌陀を射る。怪聲ありて消滅。前庭一匹の古狸箭に貫かれて斃る。キリスト教徒の見神の如きも概ね此の類。審神サニハの道眼明徹を要す。

○第百六十則

除夜の鐘鳴る。舊歲何れへ去り、新年何れより來るや。去らず來らずと觀するも可。去れり來れりとするも妙。人間の神變亦た只だ然り。宋美齡筋斗を打翻す。

○第六十一則

人間神變後。以前の生活より將^モち來るものは知識、忠義、仁愛、徳行の報、趣味等のみ。地位、名譽、財産等は晝餅のみ。

○第六十二則

格別なる惡逆無道の人に非ざる限り、神變の際の苦悶は傍人の觀るほどのものに非ずして、當人案外氣樂にて、何でも無きものなり。このこと餘り宣傳すれば、世人神變を輕んずる故に詳説すべからざるなり。

○第六十三則

人間も萬物も念々刻々神變の中に在り。否な神變そのものが人間なり萬物なり。人間萬物そのものが神變なり。神變

が神變に逢著するものでなく、神變を心配するは要らぬことなり。平生このこと能く覺悟しておくべし。よく見究めおくべし。臍落ちするまで練りに練つておくべし。ますみのむすびなり。エホバを不憫がり、威音王を愛撫す。

○第六十四則

石の上にも三十年。人生踏躐。

○第六十五則

人は日々夜々物に觸れ事に感じて或ひは神となり或ひは仙となり或ひは鬼となり或ひは魔となりつゝあり。此のこと一應點頭し得るも徹底して覺知するもの稀れなり。其の「むすび」の鹽梅は直ちに來世の玄胎生活に影響す。

○第百六十六則

尋常習見の語を以て穩實の極則を提示すれば輕易して耳を傾けず。すこしく奇怪に似たる句を拈起すれば倏ち感動して苦吟せむとす。それらは皆な言葉なり。徒らに面熱して裊褲外を爬著するのみ。

○百第六十七則

姑は只だ嫁の古きものなり。

○第百六十八則

千人針。虎は嘯き。龍は吟せず。

○第百六十九則

有りさうで無きもの。無ささうで有るもの。販海の波斯大

唐に入る。

○第百七十則

使ひて使ひて使ひ棄てたる女房の腰卷の古いのも立派な火薬と化けて國を護る。

○第百七十一則

人生は苦勞艱難する目的の爲めの世界なり。苦勞するものは即ち人生の目的を達しつゝあるにて成功なり。苦勞を有難しども思はぬは贅澤の至りなり。苦勞艱難の嫌ひな人は御遠慮なくお先きへ參られたし。

○第百七十二則

十言神咒一心不亂奉唱五分間。その間實に三生六十劫を

經過すと云ふ。いつたい何時まで生きるつもり乎。驚く勿れ
今年は實に昭和十三年。

○第七十三則

あらゆる科學的哲學的宗教的智解情量に囚はれず、日々
正しき神祇を禮拜すること、萬劫にも惡道に墮せざる秘訣
なり。病榻に在る人の如きは一日一分間にても心中にて禮
拜するだけにて可なり。是れ至極の大事なり。

○第七十四則

少年時代、紀州山中を過ぐ。僅かに數弓のところ、磐上に奈
良朝時代服飾かと思はるゝ神女の端坐し給ふを見、驚いて
拜伏して頭をあぐるに見えず。惕若として磐根を攀ちて到

り、掌を以て磐上を試みるに暖氣あり、青色の絹絲の如きも
の寸餘なるものあり、拾ひてふどころにするに芳香馥烈に
して人を怪しましめ、暖氣あるもの半歲餘なりき。

○第七十五則

冬瓜印子の連中の中に、神祇を敬拜し神祇に祈願する者
を目睹して獨立心無き第二第三の徒なりと妄語するもの
あり。千年以來この一類の魔黨に愚せらるゝもの少なから
ず。

○第七十六則

人間は人に隠して惡を行ひ、神仙は其の蹤跡功德を人間
に知らしめずして人間を守護啓導救濟せらる。人間は目前

の是非得失をみて天を怨み神仙の存在をすら無視嘲笑す。

○第七十七則

釋迦の説きたる法は阿含部律部の中の若干のみなり。その編輯されたるも彼れ滅後二百年後なり。大乘諸經典等は廻かに後世の擬作なり。耶蘇福音書成立の歴史も亦た此れに類す。ソクラテス言行録等も然り。何千年の昔より地上の消息を俯瞰し給ふ神仙たちが一笑し居らるゝも尤もの儀なり。

○第七十八則

正神界實相の一面を知る勝縁を得たる人。その悦びを獨り包み難く隣人に其の悦びを傳へむとする心すなはち道

心なり。人の善行をみて我れ悦ぶところ即ち道心なり。善きことを人にすゝめずに居れぬ心すなはち道心なり。

○第七十九則

今の人修善積徳を以て報を天に獲むと欲す。報を期するは眞の修善積徳に非ざるを知らず。而かも然りと雖も修善積徳は修善積徳なり。虚談して實行せざるよりもオホ元いに吉なり。

○第八十則

或る部隊にては其の部隊附の新聞記者が餘りに生意氣なりし爲め追ひ出し、其の爲めに其の部隊幾多の奮闘勇功は少しも新聞紙上等に傳へられず殆んど部隊名すら新聞

紙上に、見ざるに至れり。これは昔の西洋の方の話。世の中これに類すること多し。

○第百八十一則

勢夜陀多良比賣。丹塗矢に感じて驚きて立走り伊須須岐たまひき。上古神胎のこと、神さびたりとも神さびたり。

○第百八十二則

或人云。心だに誠の道にかなひなば守らすとても我れはかまはん。柿の木云。守らすもかまはんなどといふ人に誠のあるは少なかりけり。

○第百八十三則

わづかばかりの経験にて神法道術を批評したり、求めし

ところのもの容易に得られず忽ち何とか理窟を拵へて我れは求めずと廣告しあるく等此頃輕信の徒の通常なり。潛行密用如魯如愚の人にして始めて壺中三萬里の山河を踏斷するの快時節あるべし。

○第百八十四則

此世界に於ける驚くべき一つの存在「太古神法」が黙々として日と無く夜と無く放光動地の大威力を發射しつゝあれど所謂神箭の長空を行くが如く其の蹤跡を見る人無きこそ尊けれ。千尺鯨噴いて洪浪飛び、一聲雷震うて清颺起る。

○第百八十五則

神仙から讚美せられて花を雨らせらるゝやうではマダ

山姥アゲ
本物でない。古人の語にあると、さてもさうかと思ひ、狂人の如くに空談虚喝す。神仙から花を雨つらせらるゝほどの徳を養ひ得たるもの今日地上幾箇ありや。

○第百八十六則

靈界現界不離の關係あり。國土を守護する實力大小長短は其の神祇佛天聖賢の徳力威力靈力道力に比例す。釋迦孔子耶蘇等を生みたる國土現狀如何。中世職業宗教の技巧に眩惑して本末を失アヤまる莫かれ。

○第百八十七則

宇内神界の中府は神集岳大神界なり。我が古傳「高天原」を以て云へり。此の一事を知ること宿世の勝縁に由る。只だ此

の一事を知り得て三井三菱の富を占むるに勝つ。重態の病床に在るもの只一念「神集岳の神たち守りたまへ」と念せよ。活動中の萬人亦皆な明日を知り難き重態なりと覺悟せよ。

○第百八十八則

日常道心に相應するもの正眞の道士とす。神道修行の標的此に在り。道心あるもの一言一行すべて善なり。而かも道心に相應せむとすれば卻て道心に孤負す。如何んか是れ道心に孤負せざる時。

○第百八十九則

巢は風を知り。穴は雨を知る。君は何を知るや。

○第百九十則

西諺云。婆さんが踊ると埃りが餘計に立つと。諦觀法玉法、
法王法如是。低聲々々。

○第九十一則

腦天の正中から肛門まで眞ツ二つに斬り下げられたる
時。君の靈魂は左右いづれに在りや。

○第九十二則

石城山登拜。只そのこと直ちに道福なるに更らに心を苦
しめて道福を待つ。好箇の道士、眼に瀬戸内海の風煙を看す。
風煙を看得したるものは兩肩に擔ひ去れ。

○第九十三則

如何なる幽玄高妙の大思想大哲學大宗教も所詮人間の

こしらへごととなり。天真所現神集岳中心の正神界實相は言
議思量を絶せる活ける大事實なり。

○第九十四則

或る久參の道友來り問ふ。神前にて祈願の際自我ありて
純一なり難し、如何にして自我を抛つべき。余云。只だ祈願す
べし。

○第九十五則

同志諸友尋常に云ふ。幽顯不二と。果して眞正に明々了々
として其の語の如くなるを得る乎。獨坐收目して實頭實地
に觀徹を要す。是れ學道の眼睛なり。

○第九十六則

天行居機關紙「古道」の二字。大いに仔細あり。馬を華山の陽に歸し、牛を桃林の野に放つ。

○第百九十七則

天行居の「太古神法」は實に龍屋先生に依りて天に印オウかる
ところなり。是れ天行居の以て存するところにして萬物の
狐疑に關せず。

○第百九十八則

「むすび」と「ひもろぎ」のこと、太古の神秘なるが、古來俗學其
傳を得ず。只だ徒らに活計を勞するのみ。

○第百九十九則

憶へば諸君も長き旅路に出頭し來れるものなり。昔の昔

の昔より今後はてしなき幾千萬年の旅程なり。春風六億四
千村。あしこの茶亭向ふの酒旗。ゆつくり行くべし。百年に泣
き五尺に届する勿れ。永遠に日の晩れることなき一日なり。
囊中自有錢。

○第二百則

一老人あり。方丈に屏居して數年未だ曾て門闔を出でず。
只だ瞌睡を日課として鼻雷囂々。屋壁震ひ、梁塵飛ぶ。千古の
祕寶を抛ち去り、一世の苦淡を叢ツグめて以て自ら娛み、松風を
吸ひ山色に飽き。白雲を喝散し、虚空を打破す。或ひは時に波
々劫々として脚忙手亂なるかに見えて而かも境界廓然と
して六通四闢するものゝ如く、縁に隨て放曠として自如た

り。羚羊角を失す。

○附則

僕頃来いよ、物糙の模様あり。壺中の狼毒砒霜を密封して只だ兩片皮を以て他を搽糊するの家法を守り得て切々怛々として恰かも媒人の如くに相似たり。新婦の美醜は君自ら看よ。普州名家の女。

以上

山姥といへどむかしは赤裳ひく

まぐはしころとたれかしるらむ

天行居に關することは何ごとも、周防國熊毛郡田布施、石城山、神道天行居宛に照會せられたし、既刊出版物等種々あり。

404
276

不出售

昭和十三年四月十一日印刷
昭和十四年四月廿六日發行
昭和十六年三月三十日再版

編輯者 山口縣防府市宮市 友清 歡真

印刷者 岐阜市七軒町十二番地 河田貞次郎

印刷所 岐阜市七軒町十一番地 西濃印刷株式會社
岐阜支店

發行所 山口縣防府市宮市 神道天行居鳳風寮

終